JAPAN URBAN DESIGN INSTITUTE
都市環境デザイン会議
東京都文京区本郷2-35-10
本郷瀬川ビル 〒113-0033
TELEPHONE 03-3812-6664
FACSIMILE 03-3812-6828

JUDI
058
20.JANUARY 2001
特集 "JUDI賞"これからの都市環境デザインの方向性
発行者:都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

●特集："ＪＵＤＩ賞"これからの都市環境デザインの方向性
1．JUDI設立10周年記念大会…… 1
2．JUDI賞とその選考…… 3
3．JUDI大賞 四国ブロック …… 5
4．JUDI賞 北海道ブロック …… 8
5．〃 東北ブロック ……10
6．〃 北陸ブロック ……12
7．〃 関東ブロック ……14
8．〃 中部ブロック ……16
9．〃 関西ブロック ……18
10．〃 中国ブロック ……20
11．〃 九州ブロック ……22
12．特別賞・奨励賞・功績賞・功労賞 ……24
●事務局より……27
●編集後記……28

特集："JUDI賞"これからの都市環境デザインの方向性

昨年都市環境デザイン会議 10 周年記念事業として「JUDI 賞」が設けられ、第1回の JUDI 大賞には四国ブロックから応募があった「水遊都市-ひょうたん島の環境形成活動」が選ばれた。2000 年 11 月 3 日、大津市のピアザ淡海で行われた授与式では、この大賞の他、優秀賞 8 点、特別賞 3 点、奨励賞 6 点、功績賞 6 点、功労賞 5 点が同時に表彰を受けた。

大賞選考会と授与式の模様は一部 JUDI NEWS57 号でも紹介しているが、今号では各ブロックでの JUDI 大賞候補の選考は各ブロックでの JUDI 大賞候補の選考過程での議論や、プレゼンテーターが時間不足のため会場で紹介できなかった内容等を詳しく報告していただくことした。また各地の質の高い都市環境デザイン事例の魅力を損なわないように配慮し、カラーの写真や図版を多く取り入れた。「JUDI 賞」は日本各地でのこれまでの都市デザインに関る実績に対して贈られる賞だが、多岐にわたるその内容は、これからの都市環境デザインの方向を示唆していて興味深い。

（編集担当：白濱力 近田玲子 吉田慎悟）

特集 1

JUDI設立10周年記念大会

鳴海 邦碩
NARUMI KUNIHIRO
JUDI 10周年記念大会委員長

21 世紀の幕開けです。国内外の各地の状況を見ますと、都市環境デザインの役割に新たなフェーズが訪れているようです。メンバーの皆様の都市づくりへの挑戦に期待したいと思います。

さて、ＪＵＤＩ設立 10 周年記念大会が昨年の 11 月２、３日の両日、湖国滋賀県の大津市で開催されました。ここでは、記念事業として行なわれた、第９回都市環境デザインフォーラム・関西およびその他の事業結果の概要をお知らせいたします。

ＪＵＤＩ 10 周年記念大会
委員長 鳴海邦碩

◆第９回都市環境デザインフォーラム・関西
＜環境共生型都市デザインの世界＞

「＜地球環境保全、環境共生＞は、環境や文化をも含めた都市のアメニティをデザインしなければならない我々が、正面から取り組まなければならない課題である」という問題意識のもとに、上記のテーマで、11 月２日、大津市市民会館で開催されました。基調講演には、滋賀県立大学学長の日高敏隆先生をお招きし、「共生の論理と都市」という演題でご講演をいただきました。日高先生は、都市計画や都市環境デザインなど、すべて自然ないし環境と人間の共生をキーワードに掲げているようだが、自然界の実態を見ると、彼らはいかに自らの子孫を増やすかを巡って激しく争っており、どの自然と仲良くすれば共生に繋がるのか、分からなくなる。むしろ自然に任せてしまうというか、人間が綺麗に整備しすぎたり、仕切ったりしすぎないことが大切ではないかといった視点に立って、「共生の論理」について問題提起いただきました。

この基調講演を踏まえ、３つの分科会が同時並行して行なわれ、フォーラムの最後にそれぞれの分科会のまとめが報告されました。分科会１は、「土地利用計画における環境共生」をテーマに、堀口浩司がコーデイネーターを努め、パネリストには、土

井幸平、榊原和彦、増田　昇が当たりました。分科会２は、「フロー型都市とストック型都市」、コーデイネーター井口勝文、パネリスト、加藤晃規、小林正美（京都大学）、藤田邦昭（都市問題経営研究所）、後藤　忍（科学技術振興事業団：大阪大学 藤田　壮との共同研究者）、分科会３は、「環境共生と快適性」、コーデイネーター中村伸之、パネリスト、江川直樹、佐々木葉二、清水泰博、でした。　参加者は、会員 61 名、一般 62 名、学生 63 名、計 186 名で、盛況下に終了しました。

なお、後援を、建設省近畿地方建設局、滋賀県、大阪府、兵庫県、大津市、大阪市、神戸市、京都市、都市基盤整備公団、(社)土木学会、(社)日本建築学会、(社)日本造園学会、(社)日本都市計画学会、(社)日本建築家協会、(社)再開発コーディネーター協会、(社)都市住宅学会、日本デザイン学会、日本都市計画家協会からいただき、日本興業(株)、帝金(株)、コトブキ(株)、ヨシモトポール(株)、(株)因幡デンキ製作所、松下電工(株)、金門電気(株)、関西電力(株)、大阪ガス(株)、(株)ヤマウ、三菱アルミニウム(株)、(株)ＩＮＡＸ、(株)NTT ファシリティーズの協賛を得ました。

◆船上パーティー（懇親会）

フォーラム終了後、琵琶湖汽船ビアンカ上で懇親会が開催され、参加者は 170 名を越える盛況でした。

1989 年２月、第１回都市環境デザインを考える会が東京と大阪で開催され、以降の準備過程を経て、1991 年５月都市環境デザイン会議が設立されました。準備期間を合わせれば 10 年を越えるこれまでを振り返り、当初から係わった方々の感慨はひとしおだったと思われます。

会員予備軍である学生の参加も多数見られ、協賛団体や JUDI 賞候補の方々の参加もいただき、熱気に溢れた懇親会でした。

◆JUDI 10 周年記念事業
第３回都市環境デザイン写真展

本年は、「環境共生型都市デザインの世界」のテーマで、フォトコンテストを開催いたしました。特別審査員をお願いした今森光彦先生から次のような講評をいただきました。全体について、「今年もデザインのプロとして、視点のおもしろい作品が多かったです。総じて新鮮で、さわやかな印象を与えてくれました。広角の写真に加え、今年は一歩ふみ込んだ写真が多くみられ、写真のとらえ方に変化が出てきました。環境共生というテーマのやさしさが、ヒトを通じてかんじられました」。今森賞について、「東南アジアの市場は暖かさに包まれています。ブロイラーでない美味しそうなニワトリが売られてゆきます。オジサンの笑顔がとてもいいですね。日本にもこんな光景が残っていたらいいなと思わせるなごやかな一瞬をとらえた写真です」。

受賞者は以下のとおりで、11 月３日午前中に、ピアザ淡海にて表彰式が行なわれました。今森光彦賞：難波　健、JUDI 賞：江川直樹、優秀賞：川井由寛、堀口浩司、入　選：江川直樹、御代田和弘、丸茂弘幸、鳴海邦碩、西　斗志夫、土橋正彦、会場投票 No1 特別賞：鳴海邦碩

◆ＪＵＤＩ　１０周年記念全国大会見学会ー湖国滋賀の歴史と文化・宇治平等院を訪ねる。メイン・イベントの翌日、11 月４日、上記のテーマで見学会を開催しました。

(1)大津坂本コース　「重要伝統的建造物群保存地区の町並みと里坊の庭園見学」

比叡山の山麓に広がる大津坂本地区は、歴史的遺産に恵まれたまち。穴太衆積みの石垣に囲まれた里坊群が作り出す町並み、そして普段は非公開の庭園を見学しました。（コーディネーター　森川　稔）

(2)近江八幡コース　「八幡堀の修景と伝統的建造物群保存地区の町並み」

在郷町近江八幡の八幡堀再生は、昭和 40 年代に住民運動として始められた先駆的事例として知られます。永い年月をかけて蘇った八幡堀と、豪商の町家が並ぶ新町通、永原町の近江商人の町並みを見学しました。（コーディネーター　山崎正史）

(3)琵琶湖博物館コース　「琵琶湖博物館ー参加型の博物館の誕生」草津市の琵琶湖畔に建つ琵琶湖博物館は、10 年間の準備期間をかけて参加型で博物館づくりを進めてきました。展示では淡水水族館やハンズ・オンの工夫なども人気があります。この博物館の開館までの苦労話を聞きながら見学しました。(コーディネーター　澤木昌典)

(4)宇治平等院コース　「宇治における歴史的環境資源の再生と景観整備」　「源氏物語ミュージアム」や「宇治上神社」を見学のあと、「平等院」を訪れ、平安時代の庭園遺構の復元整備、新宝物館と境内の環境整備、周辺地域での景観整備などを見学しました。(コーディネーター　宮城俊作)

注：フォーラムについては、冊子『環境共生型都市デザインの世界』が作成されています。また、http://web.kyotoinet.or.jp/org/gakugei/judi/forum/forum9/index.htm を参照下さい。

特集　2

JUDI賞とその選考

南條　道昌
NANJYO　MITIMASA
JUDI賞選考委員会委員長

都市環境デザイン会議が何らかの顕彰活動をすべきだという議論は、会議の設立当初から代表幹事会の議題に上がってきた。しかしながら何をどのように表彰するのか?という点で議論が煮詰まらず、10 年近い月日が流れた。2000 年に 10 周年記念事業を行うということを定めた代表幹事会の折りに、JUDI 賞を設けてその表彰式を行うということが決められ、私と面出薫さんが担当ということになった。一年足らずの間に JUDI 賞の内容を定め、選考方法を決めて具体的な表彰式のプログラムを実行することを、ボランティア活動で乗り切るのは至難の業と思えた。

ましてや　時代の潮流は確実に変わり、都市環境への民間投資は急速に退潮するばかりか、経済運営そのものの構造が変わらねばならない転換期を迎えている。経済成長を前提に組み立てられていた都市環境の形成にかかる事業論は、これからの時代には成り立たなくなるものが多い。こんな良い都市空間を創りましたというものを表彰することだけでは、これからの時代の都市環境デザインの運動を先導する事になりにくい。しかしながら　決して好調とはいえない、環境づくりの業界や、私たち会議の構成員が少しは元気を出す仕組みも必要である。代表幹事会の決定はそのような思いがあってのことだと考えられる。そのためには拙速であっても、とにかく第一回の JUDI 賞の存在を創ることに意義がある。

そこで JUDI 賞とは何か?ということを選ばれた少数の人々で定めて、その枠組みに適合するものを選考するという方式はとらず、少なくとも建築や土木構造物や造園的作品や照明　その他の単体デザインで優れているものという視点ではなく、歴史的な遺構なども含めた複合的な要素で構成され、その維持や活用についての社会的なソフトが存在している都市を構成している環境空間という枠組みのもとに、各ブロックにおいて、そのブロックにおいての JUDI 賞とは何か?を議論してもらい、場所、作品、活動などを選考理由とともに選んでいただくという方式を採用した。今日の潮流から見れば、全国画一的な方向ではなく、地域ごとの個性や価値観の相違によって、主張点が異なる考えかたが現れることがこれからの時代の社会や都市にとって必要だと考えたからである。

写真撮影：1～5　土橋正彦　6　森川　稔

写真 1．日高敏隆先生の基調講

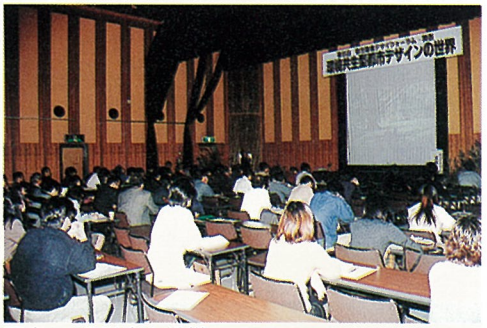


写真 2．分科会の模様

写真 3．分科会報告及びまとめ：すすきを配した舞台づくり

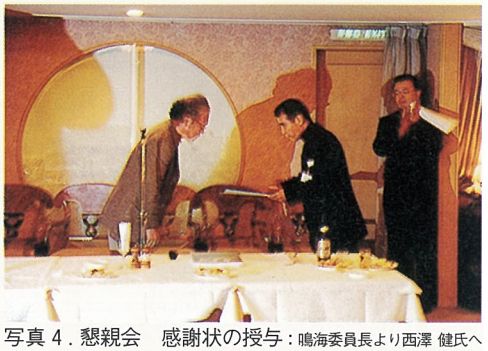


写真 4．懇親会　感謝状の授与：鳴海委員長より西澤 健氏へ

写真 5．懇親会　爽やかな甲板上での交流の一時

写真 6．見学会の様子　坂本グループ

結果を見ると各ブロックとも相当の議論を重ねられて、1～数点の JUDI 賞あるいは JUDI 大賞へのブロック選考をして下さった。本当にご苦労さまでしたそして有り難うございました。先人たちの残した空間遺産を今日につないでいる活動、空間環境づくりを市民たちの楽しみに結びつけながら行っている活動、社会的なソフトも含めて新しい都市空間づくりを行ったもの、そしてこれからの環境の循環的維持に関わる遺産やそれらにかかわる市民活動などを紹介するパネルが、地域ごとに視点が若干異なる形で 9 ブロックから寄せられた。

このように視点の異なるパネルを前にして、議論が白熱したのが選考委員会である。JUDI 賞設定の意義の根本論から、個別のパネルの作成の意図・内容についてまで、多くの意見を巡って議論が行われた。単一の候補に絞ったブロックに関してはその内容の適格性を、複数以上の候補を挙げられたブロックに関しては最も良く次代の都市環境づくりの方向を示すものはどれかの観点を中心にして論議・選考し、大賞の候補となる 9 ブロックの JUDI 優秀賞を決定する事ができた。その他それぞれのパネルの主張点とその社会的な意味を考察して、特別賞、奨励賞、功績賞、功労賞などを決定した。真摯かつ建設的に長時間の討議・決定の論議に咲かしていただいた選考委員の各位に厚くお礼を申し上げたい。

こうした課程を通じて、明瞭に時代的な価値観の変化の方向が立ち現れてきているように思われる。第一は、都市環境デザインという領域の設定の中に、公的権力、資本の投資力の公共の福祉への貢献という視点だけではなく、市民参加の力が大きくクローズアップされてきていることである。市民の活動が集積して都市の環境空間の改善や、その場の利用活用の新たな展開を生み出しつつある例の紹介が JUDI 優秀賞の過半を占めることとなっている。第二の方向は、都市環境を捉える際の環境的持続性の重視の方向である。明治神宮の森や奈良公園のような空間が都市の中に存在していることと、その維持が巧みな仕組みによって図られていることなどが、これからの都市環境のあり方への示唆を持つものとして挙げられている。また第一の市民の関心もこのような環境の浄化や維持に関わるものが多い.

こうした背景のもとに 11 月 3 日の大賞を選考委員と会場に参集された方々との投票によって決める日のプレゼンテーションを迎えたが、その投票結果はさらにこうした潮流の変化を端的に表すものとなった。大賞を獲得した徳島のひょうたん島の活動は、川の環境美化をゴミ拾いから始め、次第に川辺の環境整備に結びつけ船や、川辺のボードデッキを活用したイベントを市民が楽しみながら都市空間としての川を変えてきたものである。デザイナーがどうデザインしたかではなく、都市環境のデザインということは、こうした人々の共感づくりから活動として始まることを、そして人とともに楽しみながらルールづくりや空間の約束事を創っていくことの可能性があることを、私たちに示してくれるすばらしい事例であり、会場の方々の共感を生んだのだと考えられる。その素朴なプレゼンテーションが素晴らしかった。

拙速にことに取り組んだため、説明不足や連絡の不備など多々反省すべき点があるが、少なくとも第一回の JUDI 賞は何とか大賞の決定までの道のりを歩むことができた。これはひとえに関西ブロックにお願いしたフォーラムの諸準備に携わられた方々、JUDI 賞の事務局役をお願いした方々の努力の賜である。ここに深甚なる感謝の言葉を述べるとともに、3 年後に予定する第 2 回のより良い内容の準備に入る体制を起こしていただきたい。ご協力誠に有り難うございました。

JUDI大賞四国ブロック

「水遊都市」ひょうたん島の環境形成活動

島　博司
SHIMA HIROSHI
NPO法人新町川を守る会理事

ＮＰＯ法人新町川を守る会

1.受賞を今後の活動の励みとします

四国ブロックからは、ただ一つの候補としてＪＵＤＩ賞に応募し、思いもかけぬ受賞を頂き、驚いています。

大津での発表は、ＮＰＯ法人を設立する際に理事になった活動経験の浅い私よりも、会をつくり、常に活動の中心にいる理事長自らの肉声を聞いて頂いた方が、活動のあり方を感じとって頂けるだろうと、たまたま東京での会合の帰りに大津に寄って頂きました。理事長以下、私達役員は、第１回の受賞を私達の活動だけでなく関係する周辺の活動や物的整備とともに、徳島市中心部一帯に相互に影響を与えてできてきた現在と、将来に持続する都市環境形成活動の総体に期待を込めて頂いたものと受賞の意義を拝察しております。

この紙面をお借りして、会の活動の概要と現在、検討中の新たな活動への希望をご紹介します。ＪＵＤＩ会員の皆様方のご参考になれば幸いだと思います。

２．会の発足から活動の中心は川の掃除

新町川を守る会（特定非営利活動法人として 1999 年８月登記）は、活動歴 11 年目、節目の年になる 2000 年に、３つの賞（５月に環境庁長官賞、11 月にＪＵＤＩ大賞と自治大臣賞）を頂きました。約 10 名で発足した本会は、汚染されていた新町川の掃除から始めています。最初の数年は、漁師やヨットクラブの船を借りていたのを会員が拡大するにしたがい、会員費で掃除の船を購入し、月２回の定期的な掃除を行っています。掃除は、汚れた服装ではなく、お洒落で目立つ姿で恰好よくやろうというのが本会の掃除のモットーになっています。そのうち、小学校の子供たち、徳島市の新人研修、企業の研修でも掃除を行うようになりました。「できる人ができることをできる時に」が本会の精神ですが、いつしか新町川の掃除は、吉野川下流域へ、上流へ、海へと様々な活動団体と連携しながら拡大してきました。

３．水面も水際も使われてこそ、私達は川と街に生きていると言えます

(1)ひょうたん島周遊船

吉野川のデルタ地帯の南部、徳島市の中心部を流れる新町川と助任川に囲まれた周囲約６Km の中洲の地域をいつしか「ひょうたん島」と呼ぶようになりました。1995 年に 14 人乗りの中古の双胴船をローンで購入（昨年やっとローンを返済）し、ひょうたん島巡りの無料周遊船を土・日、祭日、川に関連するイベント時などに運行を始めました。大人気です。始めて、川から街を観る人々は、川の汚れとともに、如何に水と街が一体であるかを感じ取ってくれます。1997 年に２隻目の双胴船をやはりローンで購入し、交互に動かしています。いつしか小学校の子供達も課外授業で清掃船や周遊船に乗船するようになりました。

時には、吉野川へも周遊船を動かしています。話題の吉野川第十堰も川の正面からみると圧巻なのです。

写真１．新町川の清掃風景/月２回実施

１昨年から、船長を確保し、毎日運行を始めています。昨春、水際に台船の設置と船を改造し、車椅子でも乗船可能にしてから、障害者（予約）の方々の乗船が増加しています。昨年の 12 月に重度の障害を持つ子供達から、たどたどしい字体で書いた礼状を頂きました。わずか１行の文字を長い時間をかけて書いたものであることは、文字をみれば分かります。喜びは、共にあるものと思い、この周遊船の活動は、さらに充実しようと思っています。老朽化した船を買い換え、装備を充実した船を手に入れようと目論でいます。

（2）四季のラブリバーフェスティバル

新町川は、昭和の始めまで水運の拠点でした。川沿いには、大小の船が横付けし、問屋と商店が発達して、今の中心商店街が形成されましたが、いつしか川は汚れ、人も川沿いを歩かないほど汚染された時期がありました。その川沿いで商店街の活性化のためにもイベントをやろうと商店街が中心となって活動を始めたものを本会が引き継ぎ、年に１回だったのを四季を彩る様々なイベントを行うようになりました。真冬１月寒中水泳大会、真夏のボートレース、仲秋の観月演奏会、12 月のクリスマスイベント（船から 3000 個のプレゼントを配付)などは、その中心的な活動です。

７月下旬に吉野川フェスティバルを 3 日間開催して８年になります。台風に遭遇した年を除けば、毎年約５万人が参加します。勿論、初日の早朝は、吉野川の河川敷で約１万人の大清掃を行っています。まずは、掃除してから活動開始も基本の一つです。本会は「3000 円を払って会員になると掃除をする権利を与える」といつも理事の口癖になっていますが、イベントになれば、「会員でなくても人間が汚したものを人間が片づけるのが当然」と理事長は叱咤激励しています。

４．未来は日々の活動の蓄積でつくります

2001 年は、海と山、離島のゴミ掃除と吉野川源流地帯の環境保全活動を行う予定です。

出会いは、不意に訪れる小さなきっかけが大きく育つ活動になることがあります。１昨年に、漁師が海のゴミを県庁前に積み上げ、デモンストレーションを行ったことがありました。その後、徳島県新漁業士会（県内若手漁師の集まり）のメンバーと知り合い、大阪湾や紀伊水道から漂流するゴミが潮流の関係で阿南市の沖合約６km の伊島の海岸に漂着し、大量に堆積していることを知りました。ささゆりの自生する美しい離島（人口約 200 人)、ボランティアを送り込み海岸に堆積している不燃ゴミの山を片づけようと企画されました。漁業士会と本会が主催となり、県内外の環境保全団体に呼びかけるとともに、一般募集を行い「ささゆりの島クリーンアップ作戦」を昨年７月に実施しました。約 150 人が参加してくれました。離島のために、物資と人員を漁船５隻をチャーターして輸送し、徳島ヨットクラブもヨットで離島まで若者を送り込んでくれました。離島では漁業組合や島民が大歓迎で、素晴らしい手づくり

写真２．車椅子対応の周遊船始動2000年3月

の昼食パーティを浜辺で用意してくれました。今年は、本格的な体制を整え、約3000トンのゴミを数年かけて片づけようと考えています。

離島のクリーンアップ作戦には、高知からも参加してくれました。今年は、高知ＮＰＯの団体が中心になって、吉野川の源流地帯（高知県）で四国四県の環境保全団体が参加して源流域の森林保全活動等に乗り出すことを企画、検討中です。1990 年に徳島市中心部の川掃除を始めてから、徐々に活動範囲が広がってきています。これからは、周辺の活動団体と手を組みながら、一つの団体でできないことを複数の団体で可能性を開いていくことができるだろうと、新たな活動の展開に期待しております。

5．私たちのような活動団体は、どのような評価を得るのでしょうか

任意団体、ＮＰＯ団体は今後ますます多様な活動が広がるだろうと考えています。柔軟なネットワークを人的繋がりでつくりつつ、地道な活動も挑戦的な活動もさらにその領域を開拓していくだろうと思っています。本会の活動の展開もその動きの中にあり、関連する自治体や企業との関係も模索しながら、或いは様々な軋轢も経験しながら、相互乗り入れの協働体制がつくられていくと思います。

今は、まだ本会を含めて活動の成果を社会的に評価する見方や方法を持っていない状況にあります。活動団体は、心ある人々に支えられた善意の集団からミッションと成果を明確化する組織的な集団に高めていく段階に入っていると考えています。さらに活動能力を高め、社会的影響力を持つためには、見識ある専門家の幅広い参画が必要になっています。そのためにも、本会の活動を自己評価しようと１昨年から調査データーを蓄積しつつあります。今春に、その結果の一部をレポートにまとめて公表しようと考えています。関係団体や自治体、ＪＵＤＩにもご送付し、皆様のご意見やご批判を頂ければ有り難いと思っています。私達の活動は、まだ未熟であります。活動が発展してきたのは、会員や市民の支持によるものと自覚しております。昨年から節目の時期に入っていると思い、情報公開や組織体制の強化なども本会の課題です。大賞受賞の感謝とともに皆様のご活躍とご発展を祈念し、拙い小稿を終わります。

写真３．ささゆりの島クリーンアップ作戦（昨年７月に試験的に実施し大好評）

JUDI賞　北海道ブロック

「函館からトラスト」
函館市民まちづくりを応援する基金

柳田　良三
YANAGIDA RYOZOU
柳田石塚建築計画事務所

函館山の麓、西部地区と呼ばれる界隈には、明治から昭和初期にかけての洋風、和洋折衷様式の歴史的建物が今も多く残っている。それらの下見板の外壁や窓、軒の装飾に、緑、ピンク、ベージュ、白、水色、茶、黄色など様々な色のペンキが塗られ、楽しげで個性的な街並みをつくりだしている。１９８８年から下見板のペンキ色彩にこだわった街並み探索研究に取り組んだ市民グループに「元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会」がある。函館の市民まちづくり基金「函館からトラスト（正式名称を「公益信託函館色彩まちづくり基金」という）はこの活動を母体に生まれたものである。

函館・街並み色彩研究は１９９１年トヨタ財団から研究コンクールの最優秀賞を受け、研究奨励金２０００万円を獲得することになった。この研究の意味は、建物の色彩にこめた地域にすむ人々の街への思いやささやかだが楽しい自己表現のあり方といったものに加え、住民が街を守り、環境向上の努力を進めていくうえで、自分たちの手で街の環境を実体的に発見し、自ら働きかけを行うことが如何に重要であるかを認識したことであった。この認識をさらに発展的にまちづくりを進めていくために、新しい仕組みである「まちづくり公益信託」を活用し、函館独自の市民まちづくり方式をつくれないかということになった。２０００万円を公益信託の基金に活用して、街並み色彩に代表される魅力的な函館の歴史的環境を今後も安定した地域の生活基盤としていくべく、市民が市民のまちづくり活動を支援する仕組みをつくりだそうというものであった。

1　函館からトラストの仕組み

そして２年の準備をへ、１９９３年７月「公益信託函館色彩まちづくり基金」が誕生した。それはまちづくり公益信託制度のなかで、特に市民運動が委託者となって設定されたものとしては全国でもはじめての試みであった。

公益信託とは基金を委託者から受託した信託銀行が財産を運用し、収益を公益事業に提供する制度である。しかし信託銀行はまちづくりの専門知識や地域の情報をもたないし、信託報酬の範囲内では活動内容も限定されるので、活発な活動を行おうとすれば、やはりしっかりした事務機関の確立ということが課題となる。

函館の場合では元町倶楽部を核に住民、まちづくりや都市計画のボランティアによる「函館からトラスト事務局」を信託銀行を補佐するかたちで設定し、助成先の公募事務や、助成団体への情報提供やアドヴァイス、基金のニュースレターの発行、報告会の開催、募金活動等、基金を運営、支援する様々な活動を機動的に行う体制をつくりだした。

2　函館からトラストの運営

「函館からトラスト」は５つのからにこだわって、市民まちづくりを支援していこうとかんがえている。

●函館のカラーのこだわる
函館のカラー（色彩や地域の歴史文化）にこだわった街並み、まちづくりを支援する。

●函館からの発信
市民の活動要求を育て、市民まちづくりの活動の輪をひろげていく。

●からくち（辛口）の情報
行政、市民にとって辛口の内容や言いにくい事を自由に言い合える場として。

●カタリスト（触媒）としての「から」
基金に関係する人々、活動のカタリスト（触媒）として機能する「函館からトラスト事務局」と情報媒体としての機関誌「から」の発行。

●目に見える成果から助成
活動を通して実際の環境に、目に見える成果を着実に積み上げていく。成果を通して、市民、行政、企業等の基金への評価を高めてもらおうとかんがえている。

3　函館からトラストの助成活動

１９９３年末に最初の助成活動がスタートして、７年がたつが、その間計２０件の助成、３件の事務局の自主事業の活動が支援が行われている。そのいくつかを紹介してみよう。

●歴史的な下見板建築のペンキ塗り替え活動基金誕生の発端ともなっただけに、下見板張りの町家のペンキ塗り替えは毎年、基金の看板事業となっている。北海道大学と地元の函館工業高校の建築学科の学生グループが中心となり、市民ボランティアも巻き込み数十人規模のペンキ塗り替え隊が組織されている。ペンキの塗り替えにより街並みに影響を及ぼすには、１軒だけでなく複数のまとまったリニューアルが効果的である。隣が塗り替え予定のある建物を選んだり、２～３軒まとまって塗り替える３軒連続効果をねらうなど、次第に街並みのレベルでの建物ペンキ塗り替えに、活動が広がりつつある。ペンキ塗り替えは最初「こすり出し」による色彩分析にもとづき、コンピューター・グラフィックスによるシミュレーションで、塗り換えの色を建物の持ち主と一緒に考えることから始まる。

作業は夏の週末の２日間に一気に行われるが、最後に足場が外された時、風化した外壁と街並みが、見違えるように輝く瞬間が出現する。ペンキ塗り替えの対象となる歴史的な下見板建築は、行政の外観修復への支援策のある指定物件外の建物であり、観光とも縁のない普通の生活の舞台である。地区の過半を占めるこの普通の生活の舞台は急速に老齢化、老朽化が進行している。

ささやかな活動ではあるが、ペンキ塗り替えが地区の忘れられようとしている建物へ、お年寄りの所有者が若いボランティアに刺激され、もう一度愛着を取り戻す契機を生み出しつつある。その他にも、●市民の足でもある市電車両のペンキの塗り替え活動や、●衰退した商店街の再生へのプランづくり、●市民による函館の観光施設と街並みの景観調査、●奥尻地震で大きな被害を受けた歴史的建造物（旧海産商同業組合開館）の修復事業、●元町地区の古い住宅地での住民と一緒に地域の生活環境を考えるワークショップの開催、●ノルウェーへの町並み色彩研究など、様々な活動が展開されている。また「函館からトラスト事務局」も自主事業として、神戸のグループとの共同での神戸の異人館地区のペンキの色彩調査やアメリカからの建物修復とペンキ色彩の研究者の講演会の開催したり、元町倶楽部のメンバーによるローカルＦＭ放送を使ってのまちづくり講座「じろじろ大学」が開かれている。いずれも助成額は１件あたり１０～３０万円前後と少額であるが、夏の中間報告会と２月に開催する最終報告会では、各活動団体とも非常に中身の濃い活動を発表し、出席している運営委員や事務局のメンバーを驚かせることも多い。

写真上／昭和32～58年のピンク　右上／旧大町郵便局のカラー・シミュレーション　右／昭和58年以降の函館区公会堂

4　市民まちづくりへ

従来市民のまちづくりというと、なにか切実な課題や反対運動につきうごかされ、やむにやまれず立ち上がるというタイプの活動が多かったが、まちづくり公益信託からうまれつつある市民の活動は市民サイドで自主的にまちづくりのテーマを設定して市民が自ら考えて楽しみながら行動する、能動的かつ非義務的な活動が特色のように思われる。能動的なまちづくり活動では、助成額はたとえ少額でもそれが呼び水となって、満足できる成果がでるところまで、自主的に活動を展開していくケースが多いのである。問題はその呼び水と、困った時などに相談に乗ってくれる相手や情報ネットワークが用意されていることが重要なのである。市民の自主的な活動の受け皿として、財政面やノウハウ、情報提供の面からまちづくり公益信託が地域で機能する可能性がそこにあるように思う。

誕生して７年、基金自体の課題としては、低金利の影響で当初計画していたほど十分な助成・支援ができないところにの悩みがあるのはゆうまでもない。函館からトラストは、助成のための元金の取り崩しは行わずに、募金集めやチャリティコンサートなど事業益によって、最低限の助成はできる資金を確保してきた。今後も資金確保のこの方針は続けていくつもりであり、いずれは金利も上がって資金面での問題はすこしは楽になってくるかもしれない。

しかし基金の課題としてはもうひとつある。助成に関してはもっと弾力的かつ創造的なものに脱皮していく必要があるように思うのである。７年ほどたち、応募数の減少、助成対象のマンネリ化が助成活動にみられるようなってきた。一方、函館や西部地区をとりまくまちづくりの問題は様々にある。それらの問題を発掘し、課題をさきどりするかたちで助成、支援をひろげていく必要があると思うのである。

特集　5

JUDI賞　東北ブロック

「黒石こみせ通り」こみせを核にしたまちづくり

中居　敬一
NAKAI KEIICHI
中居敬一都市建築設計

青森県中央部に位置する黒石は津軽の支藩であった黒石藩の旧城下町であり、整然とした町割りや小店が残る商店街、さらに寺社などの歴史的建造物に往時の面影を残している。現在、南津軽の豊かな農業地帯の中核都市として役目を果たしているものの、今後、近隣の弘前、青森の都市基盤の充実にともなって中心的役割が両都市に吸収されるという懸念もなくはない。

こうした広域な状況の変化に対応しつつ、今後、黒石の町が南津軽の拠点としてさらに発展していくためには両市にない独自のまちづくりが求められている。このような状況下に歴史的な建造物をはじめとして『こみせ通り』のすぐれた景観を活かして新たな黒石の中心市街地をつくろうとして活動している株式会社『こみせ』を紹介したい。

□なぜ JUDI 賞候補か？

・東北からの視点

東北には、縄文の昔から自然をそのまま受け入れ、互いに支えあう生活の中から育まれた、地味ではあるが共生の精神に根付いたデザインがある。機能性、経済性が優先する傾向の強い現代の都市環境デザイン状況にあって、東北のデザインには近代社会が見落としがちであった共存して生き続ける知恵と精神をもう一度取り戻し、21世紀に望まれる豊かに生きる生活のありようを東北の寡黙な環境の中から見つけ出していく事が私達の役割であるとの認識に立ち以下の事をポイントとして賞の選定にあたった。

・ JUDI 賞選定のポイント

東北の独自性が感じられるデザインとして、次のような要素を軸に候補の選定を行ない、『黒石こみせ通り』を推薦した。

・自然をできるだけありのままに生かす縄文的造型デザイン。（自然や地形になじんだ環境整備、共生のデザイン）

・気候風土により形作られたと考えられるもの。（北国としての特性、慣習から生まれる伝統的な造型デザイン）

・新しい東北イメージにチャレンジしていると思われるもの。（現代的なデザインの中に、以上の感性を内包指せながら、東北の未来に継承させようとするデザイン）

歴史的まち並みのある街、『黒石こみせ通り』『こみせ』は豪雪地域の厳しい冬を過ごすための江戸時代からの伝統的アーケードである。現代のアーケードは公道上にあるが、こみせは道路に面した個人敷地の一部分を割いて雪避けの通路として提供したもので、建物と一体となった通路空間である。雪国ならではの雪と共存して暮らす生活の知恵がある。いわば現代の公開空地の概念を先取りしたもので、環境と共生するデザインの先進事例といえよう。また『かぐち』という、街区の中にあり、敷地の奥にある倉や物置き、あるいは畑にしている中庭的土地がある。今では使用されず、空き地になっている未使用な土地を、『こみせ』の精神を現代に生かし、各戸が寄せあって通路で繋ぎ、共同の広場として協働して環境整備を行っている取り組みが『かぐち広場』である。街に新しい広がりのある空間を作り、活性化に役立てようとしている事は、東北に小さな市民意識の蓄積を見る思いである。

私的な空間であっても、ひとつの環境を共有している街が、街ぐるみで協働、互助の精神で利用していけば、既成の枠組みを超えた、豊かな公共的都市空間をことを教えてくれる好例であり、21 世紀の都市環境デザインに大いに生かしたいものである。

【図4】「こみせ」の保存と復元

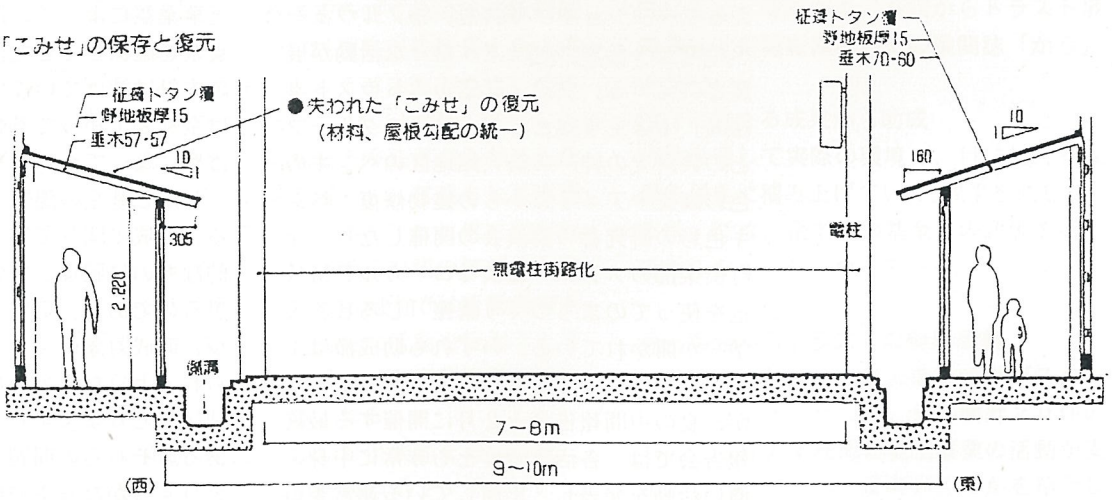


図-1

・まちづくり推進母体『津軽こみせ株式会社』

昭和 59 年に市教育委員会の手で町並み調査が行われ、保存状態の良い中町を中心として伝統的建造物郡保存地区の指定を期待できる調査結果がもたらされた。しかし当時は地域の人たちには伝建地区の指定には『生活の場である建物を文化財として縛られるのはいやだ』、『文化財にされたら、建て替えることも出来なくなる』という思いで消極的であった。そんな折に、この歴史的エリアにマンション計画がもちあがり、実行寸前までいったがさすがにこの伝統ある町並みを壊されるのはいやだ、自分達の手で町を保存しようと該当する土地代を有志で負担することとなった。これがまちづくりの母体となる『津軽こみせ株式会社』くりの母体となる『津軽こみせ株式会社』の誕生であった。以後、こみせを活かしたまちづくり方策が検討され、文科遺産の再認識と観光資源化をめざして考えだされたのが『こみせ祭り』である。

また最近では TMO 構想策定に着手し、『黒石市商業タウンマネージメント構想』が作りあがったばかりである。『津軽こみせ株式会社』の代表取締役の木下氏はこの手の構想づくりはいままでたくさん作ってきたが、実行が伴わないければ、絵に描いた餅にすぎず、今、この事業が黒石の商店街にとって最後のチャンスと思って取り組んでいく覚悟です。とコメントされており、我々東北の JUDI 会員も陰ながら応援したいと思っています。

写真 1

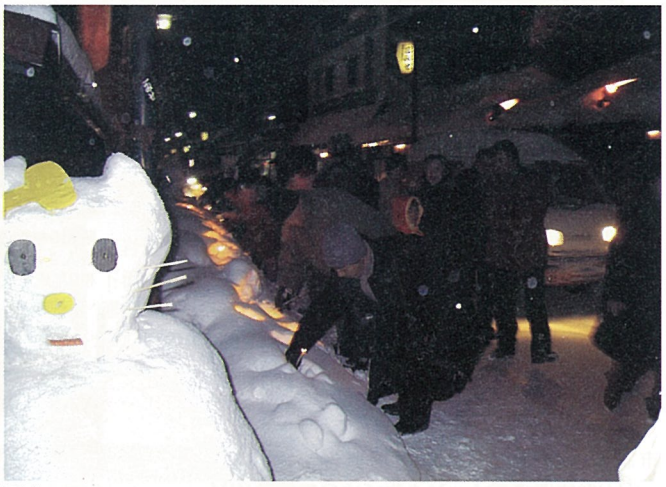


写真 2

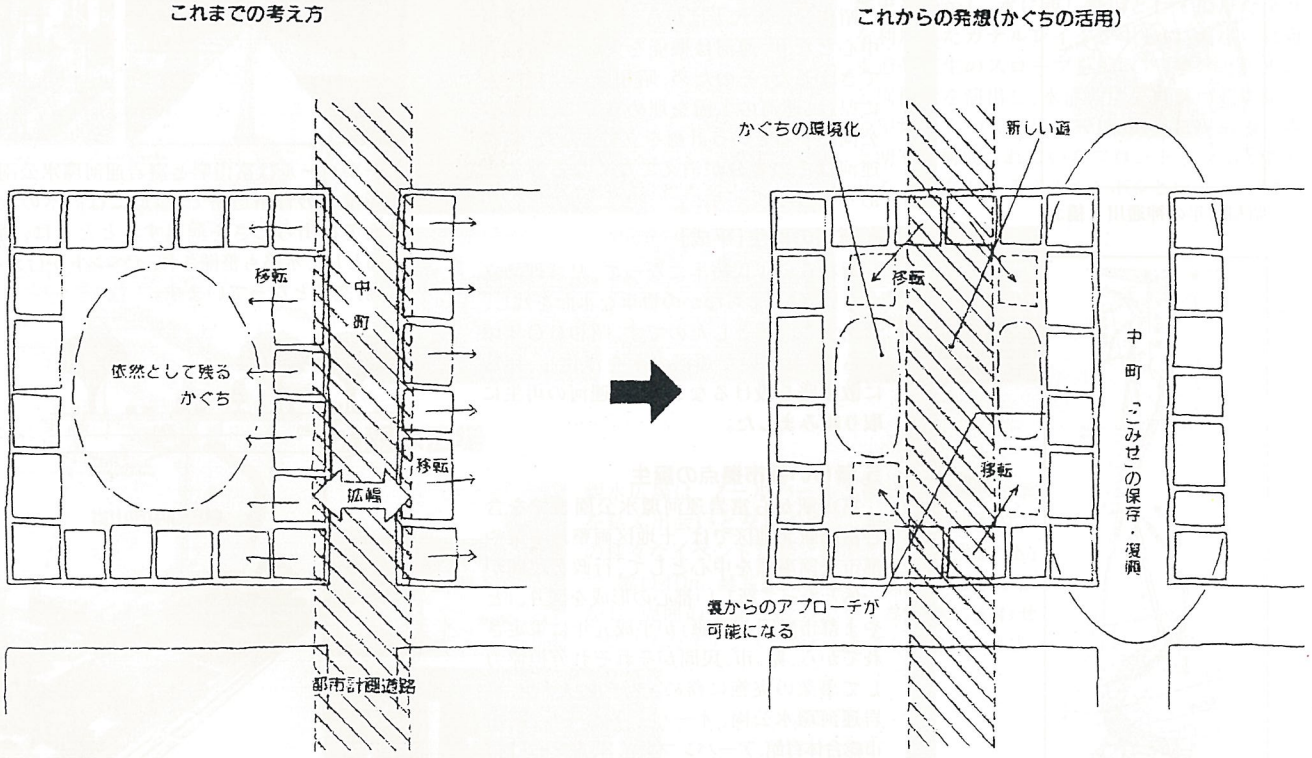


図-2.かぐら開発の考え方

「こみせ」を壊す道路拡幅ではなく、「かぐち」を通る新道によって町づくりを行う。

特集　6

JUDI賞　北陸ブロック

「とやま環水物語」
人はめぐり、人は交わる

島津　勝弘
SHIMADU KATUHIRO
島津環境グラフィックス

明治

1.暴れ川を治める[明治・大正]

その昔、神通川はまちのまん中、富山城の北で大きく蛇行しており、大雨のたびに溢れ、まちが水浸しになっていました。そこで明治３４年から、県は大がかりな改修にとりかかり、洪水を流す放水路を建設しました。大正年間には、水のほとんどが放水路を流れるようになり、もとの本流は、廃川地となり、まちの発展のさまたげとなっていました。

1912

大正

1926

昭和

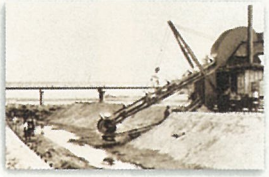
2.富岩運河の誕生[昭和初期]

昭和３年、近代的なまちづくりをめざし、県は３つの都市計画事業を決定しました。

①富山駅から東岩瀬港まで５kmの運河を建設。

②運河を掘った土砂で神通川の跡地を埋め立てて区画整理の実施。

③関連する７本の街路を建設。



昭和5年エキスカベーカーが2台投入され、富岩運河工事に着手、昭和9年に完成。

建設中の中島閘門

3.運河消滅の危機[昭和後期]

昭和３０年代半ばから、トラック輸送が中心となり、運河は機能を失い、水も汚れてきました。そのため、昭和５０年代前半に県は、運河の上流を埋め立てて、道路や公園にするという計画を立てました。富岩運河はその半分が消えてなくなる運命にありました。

1989

平成

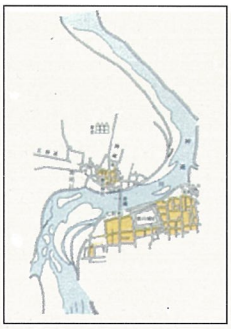
4.運河の再生[平成]

昭和５０年代後半になって、県は埋め立てを見直し、まちなかの貴重な水面を残し、活用する計画としたのです。昭和６０年頃から、汚れていた運河の水を浄化し、岸辺に散策路を設けるなど、富岩運河の再生に取り組みました。

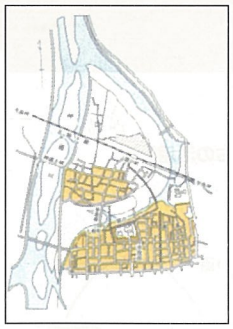
2000

5.新しい都市拠点の誕生

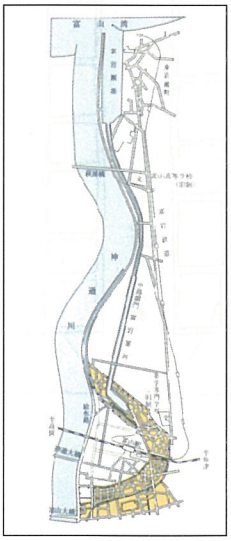
富山駅から富岩運河環水公園までを含む富山駅北地区では、土地区画整理事業や都市公園事業を中心として、行政と民間が一体となって新しい都心の形成を図り、「とやま都市MIRAI計画」が平成元年に策定されてから、県、市、民間がそれぞれ分担協力して事業の実施に務め、ブールバール、富岩運河環水公園、オーバードホール、富山市総合体育館、アーバンプレイス、タワー111、オークスカナルパークホテルなど行政や民間の様々な施設が整備され新たな都市拠点が誕生しました。



明治初年の神通川と橋北



昭和初年の神通川と橋北



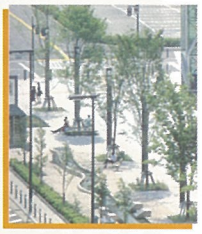
都心土地区画整理及び富岩運河平面図

7 みなとまちゾーン
Minatomachi Zone

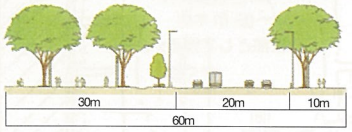
5 水のインターゾーン
Water Inter Zone

カヌーイストの団体である「ミズスマシの会」は、「リバーフェスティバル」の開催や「運河クリーンアップ作戦」等に積極的に関わり、フェスティバルでは、富岩運河環水公園から岩瀬運河までのカヌーツーリングやカヌー体験教室が行なわれています。

1 ブールバール
Boulevard



ブールバールは富山駅と富岩運河環水公園を結ぶ新都心の骨格道路で、歩道には高木の並木を植えて富山らしさを演出するとともに、潤いの空間として水路も整備され、イベントが行える「道広場」空間となっています。



富山湾は港湾施設も整備され、国内外貨物の拠点として、湾港活動の場となり、旧廻船問屋等の歴史的街並みとの融合をめざした整備をめざしています。

8 海洋性レクリエーションゾーン
Ocean Recreation Zone

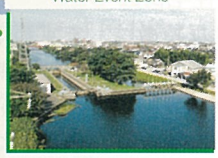
プレジャーボート
下流の岩瀬運河は、プレジャーボートの基地として整備され、繋留場所は常に満席という盛況振りです。多くの人がここから海や運河へ出掛けていき、プレジャーボートを操っています。

岩瀬運河緑地
岩瀬浜海水浴場と連携しつつ、海洋性スポーツ･レクリエーション基地として、プレジャーボートスポット、カナル会館、緑地等の整備が進められています。

6 木のかおりゾーン
Woods Zone

運河の物流機能を活かした木材関連の企業が立地し、水面貯木もみら、木に親しむための空間として、隣接する岩瀬スポーツ公園と連携した計画が進んでいます。

4 ウォーターイベントゾーン
Water Event Zone



中島閘門
平成10年に昭和の土木構造物としては全国で初めて国の重要文化財に指定され、新しい名所が誕生しました。運河の上流と下流の水位差２．５ｍを二対の扉で調整する閘門は、パナマ運河と同じ方式で、船で通過することができます。

富岩運河緑地
下流側には自然石護岸と桜並木が残る空間です。上流側は、運河緑地として遊歩道･サイクリング道が整備され、市民のいこいのスペースとなっています。

3 富岩運河環水公園
Fugan Canal Kansui Park

「富山県富岩運河環水公園」は、とやま都市MIRAI計画のシンボルゾーンとなる面積9.7haの親水文化公園です。富山の自然と富岩運河の歴史をいかし、水に親しむ場として旧舟だまりを利用したカナルレイクを中心に、両岸には遊歩道や芝生のスロープを配置し、憩いと親水の公園機能を演出し、水面の中央には両岸を結ぶ展望塔をもつ天門橋を設け、野外劇場風の広場と湧水で構成されているフロントデッキとあわせて、景観的にも都市のシンボルとなっています。

2 親水広場
Water Square

親水広場は、プールバールと富岩運河環水公園を結ぶ出会いと交流の場で、周囲の公益施設との様々なイベント活動に活用され、面積は約1haで、幅員40m、延長250mという細長い形状を活かし、周囲の空間とのつながりや機能にあわせて開放的なオアシス空間として親しまれています。

JUDI賞　関東ブロック
「幕張ベイタウン」

作山　康
SAKUYAMA YASUSHI
都市環境研究所

まず、幕張ベイタウンはＪＵＤＩ大賞候補の推薦文として次のように述べられている。

“わが国の計画的住宅設計（集団と団地型）の量産型・画一的な住棟は市の手法を、時代の変化に沿わせるように、「街をつくる」形として中庭を囲む街区型の配置を採用し、市街の景観や居住の意識を街に住み、街を創るマインドに高めようとする試みに挑戦している。また、その計画を設計と居住者の選択性との間の関係のあり方を従来と変えて、群としての協議・調整によって進めようとする手法を試みている。この意味で画期的な住宅地計画・設計手法の登場と言うことができる。さらに進めば、街をつくる社会的ソフトすなわち店舗やサービス機能の形成や更新のあり方、応募の手法などの発展を期待したい。”

さて、幕張ベイタウンとは、幕張新都心約 540ha のうちの住宅街区 84ha の名称である。ここの大きな特徴は、まず都市デザイン調整システムにある。街区毎及複数街区を含めた単位びの計画設計調整といった緻密な調整システムにより、新しいコンセプトや試みを取り入れる姿勢で一貫したデザインを通すことが出来ているという点と、大規模計画地に見られる単調さを回避し多様性を確保するために、複数事業者（２公団公社＋６民間事業者グループ、３４民間企業）や複数設計者を義務づけている点が大きな特徴である。しかも、これらは一流の建築家、プランナー、ランドスケープデザイナー、色彩計画家、ディベロッパー等を揃えている上に、複雑な調整システムの上にコラボレーションのために数十回にも及ぶ会議も行える体制が整えられ、そしてなにより事業者（千葉県企業庁）の努力と理解が得られたというバックグランドがある。また、おそらく国内で最も緻密な都市デザインガイドラインと柔軟な運用も注目される。ややもするとデザインナーが努力しなくとも形が出来てしまうのではと思われるほど詳細なガイドラインではあるが、前段に「創意工夫との発展的調和」を明記し、独創性あふれる魅力的な計画に対する柔軟な対応を行っており、ある意味でデザイナーの腕試し的なガイドラインであり、事実ガイドライン解釈のせめぎあいにより創出された空間は、良くも悪くも変化がありおもしろい。

他から見れば、体制の複雑さや人材登用・計画設計調整費用等から、ちょっとまねできないと特別視されがちに思われるが、住み手に支持される心地よい優れた空間を創出するには、このレベルの手間と知恵（調整フィーを事業者グループから捻出するなど）は当然必要なのかも知れない（２１世紀でぜひそうあって欲しい）。早い段階できめ細かな対応をすれば、後で無駄が少なくなるという考え方もある。都市の住まい方の一つの優れた事例をつくる方法論を示した意味で、２０世紀を代表する事例といえる。しかも、この計画は実質的には 1987 年頃からのスタディに始まり、1989 年の基本計画策定から現在まで１０年余りこのような日本を代表する事例をつくりあげたことも注目すべきである。（第１期は 1993 年完成）

さて、一般的に知られるところの空間的特徴である沿道型・中庭型であるが、他都市においては１、２街区単位で試みがあるものの、群として徹底させたのはもちろん国内で初めてである。但し、我が国では町屋といった沿道型都市型の住まい方が伝統的に存在しており、その意味で、２０世紀の近代化で失われてしまった伝統的な住まい方や風土に適した空間を現代風にアレンジしたものが、実は街区型ともいえる。また、経済原理主義に流されてしまった２０世紀型都市づくりに対して、人が快適に暮らせる密度や高さの限界という点から、中層街区では、容積率 200％(実際 200％強)、６、７階程度といった中層住宅の一つの解決例を示したことの意味もある（高層街区もあるので中層街区だけではないが）。もちろん、市場性・開発可能性の視点から「土地転貸借権付き分譲住宅」といった新たな借地方式の開発があってこそである。

さらに、余り注目されていないが、プランニング段階から、アクティビティの発生に気を使っており、１階の商業業務施設や

写真１. 建築家とのガイドライン解釈で激しい攻防戦のあった11番街

写真２. ガイドラインに沿った分かりやすいベイタウンスタイル

動線計画の効果が少しずつ現れ始めている。ニュータウンのセンター計画とともに批判のある下駄履き住宅を、デザインによってはこんなに魅力的になるというの手本を示している。現在はおしゃれなオープンカフェ、飲食店、花屋などが、適度な住宅地の賑わい風景を創り始めている。但し、多くは今話題の郊外型大規模店舗が消費の中心であるが・・・。

さて、ベイタウンは既に社会的に評価され各賞をいただいており、もういいだろうとの印象があったようにも感じるが、ＪＵＤＵ大賞大賞という専門家集団に評価される意味は大きく、残念ながら大賞は・・・。ＪＵＤＩ賞選定の傾向を勝手に分析すると、創りすぎたバブル期を経験して新しい空間創出の試みや優れたデザイン・システムづくりといった視点よりも、生活者や働く人々との関係性や、癒しの時代に反映した情緒的空間、住民参加・住民主体の計画づくりや運営、といったところの方が評価のウエイトが高かったように思われる。推薦文の課題にもあった社会的ソフト面は、一部で取り組み始めつつあり、もう少しＰＲすればというプレゼンターとして反省している。日常的に窓辺を花で飾る習慣やベイタウン祭り、クリスマスイルミネーションなど生活者が主体的に街を運営するなど、住民が心地よい空間をつくり楽しむことが進められようとしている。なにより、ベイタウンに住んでいる人々がニューステイタスともいえるような愛着や誇りの意識が芽生えている点が注目される。一部街区では、設計者と住民の間でサロンのような交流の機会ができて、中庭の使い方を一緒に考えたりするなどの試みも行われている。また、コミュニティ・コアの建設にあたっては、プロポーザル方式の導入や、住民との協議の中で計画するなど、新たな専門家の関わり方の開発も行っている。その意味でプランナーや建築家と、住民がよいバランス関係の中でよりよい空間づくりの試みが行われようとしているのである。住民参加でデザイン密度を上げることは至難の業であり、プロとしての専門家・集団がいつの時代でも重要となろう。ましてや住民参加といった方法論だけで納得しやすい現在の傾向の中、住民の支持を得られなければならないことは当たり前として、専門家同士が切磋琢磨した中で生み出されるデザイン水準の高い空間を自信を持って提案できることが大切ではないか。そして住民により上手に活用してもらい、必要に応じて変えていくことで、さらに住み手によって心地よい空間として育てられることが重要なのである。そうなるには、もう少し時間の経過が必要なのかも知れない。

写真３．中層街区の通りの風景

写真４．セットバック部のオープンカフェ

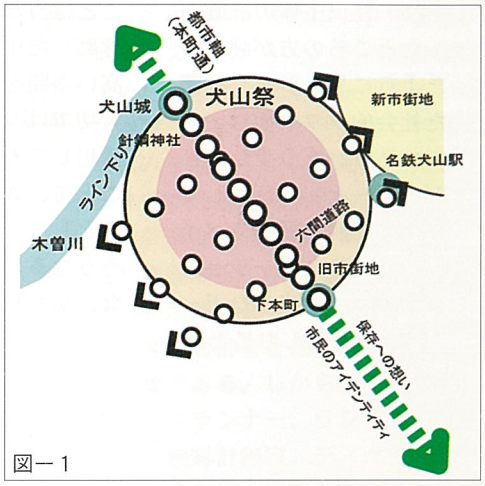
特集　8

JUDI賞　中部ブロック

「祭とバナキュラー」

谷口　庄一
TANIGUCHI SHOICHI
リージョナル・ブレインズ

中部ブロックを対象に「ＪＵＤＩ的」であり、かつ全国的な地域を挙げてみる。すると「飛騨高山」「白川郷」「伊勢志摩」「桑名・四日市」「清水港」「伊豆半島」・・・となってくるのであるが、なぜか愛知県下に「ＪＵＤＩ的」である地域を見出すことは難しい。とりあえず全国的な知名度という点を外して愛知県内を見渡すと様々な「ＪＵＤＩ的」なものが見えてくるのである。愛知県下には地区単位とも言える祭が色濃く残っており、何百年も同じ町並みが残っている訳ではないが、時代と共に更新されていく地域であってもあるコードに基づいて都市のデザインが維持されてきている。そのデザインコードが「祭」である。今回のＪＵＤＩ賞推薦に当たっては、特定の地域を紹介するのではなく、愛知県下各地域と祭との関わりに視点を当てた「ＪＵＤＩ的」なるものを提案した。



図－１

城下町：犬山

犬山城は個人所有の現存する日本最古の城である。この城が総曲輪の構をみせ、町全てが城郭として整備された。慶安 3 年（1650 年）成瀬正虎の時代から犬山祭が始まり現在まで330年以上の歴史がある。この祭は市内の中央にかつて位置していた針綱神社の祭礼であり、町の中央から始まった祭が城を含む古い町並みをそのまま保存する方向を支えてきたと言っても過言ではない。そうした各町方衆が心意気で町のヴァナキュラーな側面を形成してきたと言える。逆に下本町の下駄履き型の集合ハウスは犬山の町並みと調和せず町の雰囲気を壊した。

そうした近代的都市行政に対して、都市づくりとは逆のパワーが町方衆のコミュニティーの中に広がり、それゆえ新たな町づくりがうまくいかなかった事となるが、それが現在のゆったりとした小さな古い町の佇まいを残せる一因となったことは確かである。

門前町：津島

津島天王祭りは、およそ五百年の伝統を持ち、数多くの提灯に彩られた巻藁船がでる宵祭り、能人形を乗せた車楽船へと変わる朝祭りは、今も昔も多くの人々を魅了している。

もともと、牛頭天王を祭れば疫病を鎮めるとされ、夏に疫病がはやる都市を中心に広まった天王信仰だが、東日本の天王信仰の中心地である津島神社のある尾張では、農村や漁村にも広く浸透している。そこでは、多くの観客を集める祭りとは違い、人々が、天王迎え―天王祭り―天王送りの行事をさまざまなかたちで伝承しているのである。

このように、都市社会においての祭りは、さまざまなかたちで伝承された行事が、その地域の空間的深みや感覚的な豊かさを伴って醸成され、都市性のもつ独自の魅力を相補しつつ、アイデンティティを象徴する風景となったのである。

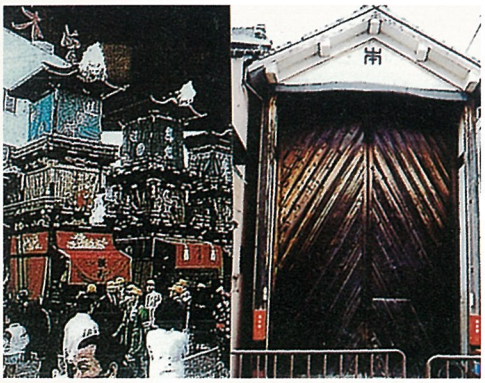
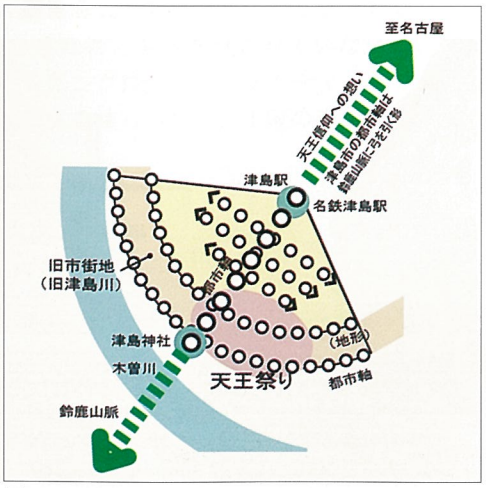


写真１　　写真２



図－２

写真３

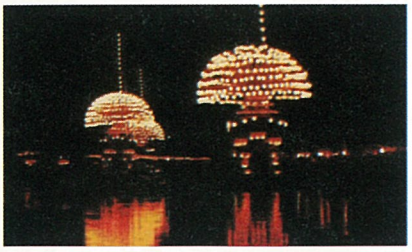


写真４

農業立国：安城

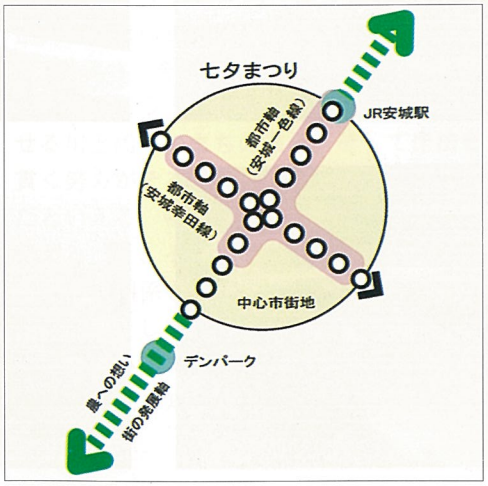
日本のデンマークと言われた安城市は、その地域特性として「農業」を大きな産業の柱として育ってきた都市である。農業の多角的経営、進取の精神がデンマークに範を乞いつつ、日本有数の農業立国として中部圏に存在を示している。同時に名古屋の衛星都市、トヨタ自動車を核とした工業都市としての性格をあわせもっている。

このような背景のなかで、日本三大七夕祭として「安城七夕祭り」が毎年８月に開かれ、多くの集客力をもつイントとして今も生き続けている。

安城の風土「農」への思いを「七夕祭り」に託しつつ、都市化の中で市の中心市街地の拠点となるＪＲ安城駅と駅前デッキを中核のイベントステージとしつつ、都市軸となる安城一色線、それに直交する安城幸田線を祭りの回遊軸とし、商店街と一体になったイベントとして、歴史ある市民の土着の祭りとして息づいている。都市の装置として、インフラとして、七夕祭り用のしつらえ（七夕の竹竿用の道路の掘り込み等）や、安城学園高校の生徒との協力によるプランター等、市民と一体になったコミュニティ形成の場ともなっている。

写真５

写真６



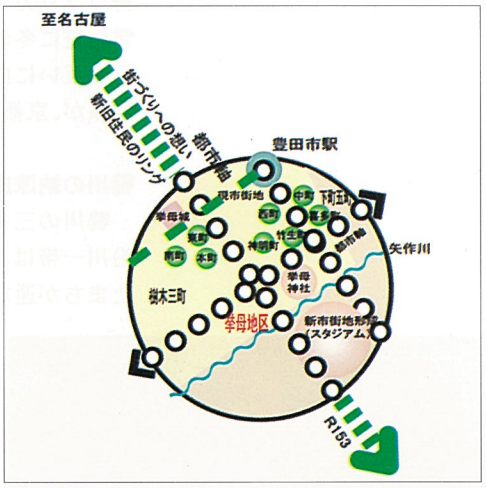
図－３

クルマのまち：豊田

歴史的背景から挙母祭りと現在の市街地形成は直接的な関係はないが、かつて、挙母城を中心に町が形成され、挙母祭りに奉納する目的で飾り車が作られた。現在は、時代の変遷に伴い、下町五町と樹木三町とに分かれているが、祭りの日には、八町揃って挙母神社に奉納することが、今も受け継がれている。

近年では、豊田おいでんまつりが、夏祭として同地区内で行われている。

このまつりは、豊田市民のまつりとして全市民、近隣市町村を巻き込んで行われ、歳月を重ねるたびにその独特な魅力を増している。この「豊田おいでんまつり」の背景にも「挙母祭り」が地域に根づいた心のまつりとしていきづいているのでは感じるものがある。これら二つのまつりは、世代の隔たりを越え、都市形成の原動力となり、豊田のまちを形成して行くことであろう。



図－４

写真７

写真８

JUDI賞　関西ブロック

「鴨川と納涼床」

土橋　正彦
TUTIHASHI MASAHIKO
アーバンスタディー研究所

京都になくてはならない川

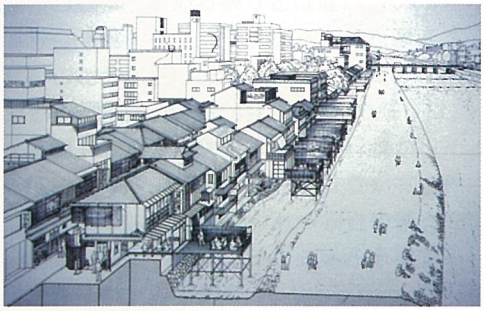
京都といえば鴨川である。平安京の東京極を限るこの人工河川の治水は、千年以上にわたって時の為政者の悩みの種であった。しかし鴨川は、その流況のために洪水がひいた後には広大な河原が姿を現す川でもあった。河原は京都の東の縁に連なるオープンスペースであり、合戦、刑の執行、高札の掲示などの場として歴史の表舞台に上る一方で、遊山の場、市場、劇場などとして市民も盛んに利用する広場としての性格を持っていた。

現代の鴨川は、流路を固定され大きく姿を変えているが、四季折々の京都を楽しむ場として、この町を味わうのに欠かせない存在であり続けている。春、新緑や桜の花を楽しむ。夏には祇園囃子に耳を傾けながら北山から運ばれる水と戯れ、大文字の送り火に別れを惜しむ。秋には紅葉を眺めながら木漏れ日の中をそぞろ歩きし、川面を舞うユリカモメの姿や上流にかすむ北山の雪化粧に冬の到来を知らされる。

お互いに向かい合った川とまち・人々の関係が、京都では今も守り伝えられている。

鴨川の納涼床

鴨川の三条大橋、四条大橋を中心とする沿川一帯は、先斗町、木屋町、祇園といったまちが連なる京都随一の繁華街である。このあたりで、毎年６月１日から９月１５日までの約３ヶ月の間、二条大橋から五条大橋にかけての鴨川右岸河川敷に、50 軒ほどの高床が張りだされる。床は鴨川の高水敷から 1.5m程の高さに設けられ、川沿いの建物の１階レベルに接続している。床は簡単な柱で支えられており、床の下にはみそそぎ川の流れがある。先斗町や木屋町に面した暖簾をくぐった客は、建物を素通りして床にくり出し、鴨川縁で涼みながら夏のひとときを楽しむ。



図ー１　賀茂川の納涼床

写真５　納涼床

写真１～４　賀茂川・鴨川の四季

納涼床の歴史

鴨川の床が一般的になったのは近世初期のことで、もともと「四条河原涼み」という祇園会に伴う年中行事であったという。期間は旧暦６月７日から１８日までの祭礼中に限られ、残された絵図などを見ると今日の高床式とは異なって、携帯式の床几を河原のここ彼処に据える形態であった。河原涼みは江戸時代を通じて盛んになり、期間が延長されるとともに今日見るような高床式の床も姿を現した。その後、明治以降の近代工法による河川改修や鴨川運河の開削に伴い、床几式の床と左岸の高床は姿を消して、現在のような右岸の高床のみの形態に至っている。

床のしきたり

鴨川は一級河川であり、床は河川を占用して設置される。また、床はもともと東山や鴨川の流れを眺めながら涼むための構造物であったが、同時に川向かいや河川敷から眺められる重要な景観構成要素ともなっている。そのため、床については治水面からの配慮と同時に都市景観面からの配慮も欠かすことができず、設置に関して様々なルールが設けられている。紆余曲折を経て、今日では行政は「鴨川納涼床について（昭和 27 年５月通達）」を定め、民間は「鴨涯保勝会」を中心とした活動によって納涼床の風致を保つ努力を積み重ねている。また鴨涯保勝会は床の形態をコントロールするだけにとどまらず、他の団体とも連携して鴨川の環境を守る活動にも積極的に参画している。納涼床とその存在基盤である鴨川を守るための「作法」あるいは「しきたり」が出来上がっているといえよう。鴨川の納涼床の存在は、鴨川の魅力を守り育てる知恵とその実践の結実なのである。

床を楽しむ

鴨川の納涼床は１級河川を占用して行われる特異な行事である。しかし、夏の京都に欠かせない風物であり、そのあり様は全く「特異さ」を感じさせない。この状況は、川を楽しもうと思う人々の存在、そう思わせる川と両岸のまちの様子、そして作法を貫く努力がそろって初めて作られているのだといえる。鴨川の納涼床は、伝統を守り伝えること、そしてお互いに向かい合う川とまちの関係を作る作法の大切さを教えてくれる。そして人々は仮設のお座敷で川涼みを楽しみ、また、その楽しむ姿を河原から眺めて夏を知る。京都は幸福なまちである。

図－２　浮世絵に描かれた床

写真６　鴨川とみそそぎ川

写真７　涼んで楽しむ・見て楽しむ

本稿の記載内容の多くは「水辺におけるアメニティの変遷に関する研究」,土木計画学研究論文集 No.16,1999,田中尚人,川崎雅史,牧田通によっている。

写真提供：田中尚人,山崎正史,長谷川弘直

JUDI大賞中国ブロック

「公共空間活用への一連の取り組み」

松波　龍一
MATUNAMI RYUICHI
松波計画事務所

1　オープンカフェ・・・

広島市の都心部で、豊かなオープンスペースを活用して賑わいを創り出そうという取り組みである。内容は、オープンカフェ、パラソルギャラリー、ミニコンサートなどが中心である。その時々、その場その場でいろいろな市民団体が連携して継続的に取り組んできたが、次第に場所も拡がり、広島の風物詩となりつつある。受賞対象団体として、カフェテラス倶楽部、広島青年会議所、平和大通り有効活用実行委員会、建築士会広島支部まちづくり委員会、上幟町東・京橋川水辺のまちづくり委員会、元安川河岸緑地有効活用実行委員会をあげた。

以下に、簡単に取り組みの経緯を紹介する（見出し行”：”に続くアルファベットは次ページの地図中のポイントを、数字は実施年を示す）。

2　カフェテラス倶楽部の実践：A～E、G、I、1995～

カフェテラス倶楽部は、平和大通りや河岸緑地でコーヒーを飲もうという有志が集まり、1995 年に発足した。公園や緑地に椅子テーブルやパラソルを持ち込んでドリップコーヒーの無料サービス提供（カフェテラスゲリラといっている）、事例や制度の研究、他のカフェテラス開設への協力など、カフェテラス実現に向けて様々な活動を続けている。多くの場所でカフェテラスゲリラを実践してきたが、現在では平和大通りの定点で月 1 回ペースで実施。実施回数はすでに 70 回を超えた。

3　オープンカフェナイト開催：D、E、F、G、1996～1998

広島文化デザイン会議（事務局：広島青年会議所）の分科会イベントとして、3 年連続で平和大通りの緑地帯に 2 日間の無料オープンカフェを開設した。このオープンカフェの開設は、その後の平和大通りや元安川河岸緑地における実行委員会形式による実施にあたって、よい先例となった。

4　平和大通りのオープンカフェ：D、F、1998～

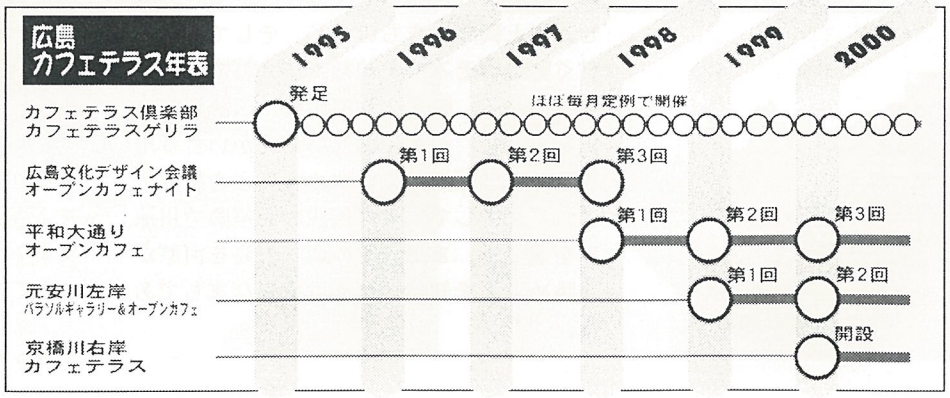
広島市の公共空間を活用した賑わいづくり事業の最初の取組として、平和大通り有効活用実行委員会（事務局：広島市観光協会）が平和大通り緑地帯で本格的なオープンカフェを開設した。初年度は直営で、2 年目以降は出店者をコンペで選定し委託する方法で営業している。初年度は 1 ヵ月間、2 年目は 2 ヵ月間と開設期間を拡大している。

5　元安川河岸緑地のパラソルギャラリー＆カフェ：H、1999～

元安川河岸利緑地有効活用実行委員会（事務局：広島市観光協会）が河岸緑地を市民や観光客にとって魅力的な空間とするため、原爆ドーム南側の河岸緑地（元安川左岸）に公募による「パラソルギャラリー」と直営方式による「オープンカフェ」を開設した。初年度は 2 ヵ月間の試行を経て、2 年目は 7 ヵ月間と実施期間を拡大している。オープンカフェでは、新規に開発したテイクアウトブース「オクトカフェ」を使用し、全体のシンボルとしている。

6　京橋川河岸緑地のカフェテラス：I、J、2000～

京橋川右岸の上幟町東地区の地元町内会が主体となり「上幟町東・京橋川水辺のまちづくり委員会」（事務局：広島市都市デザイン室）を結成し、河岸に立地する 2 つのホテルの地先緑地帯にカフェテラスを開設した。運営はホテルに委託して行い、カフェの収益は委員会の公益的な活動事業費として還元される。初年度の 2000 年は 8 月 18 日～10 月 29 日の毎日、計 73 日間開設した。このカフェテラスの開設に先だち、建築士会広島支部まちづくり委員会とカフェテラス倶楽部が協力して、1999 年末から京橋川右岸河岸緑地で無料カフェテラスを月 1 回開設し、利用者へのアンケートや地元へのチラシ配付などの支援活動を行っている。



カフェテラス倶楽部のゲリラ風景（D）

オープンナイトカフェ実施（G）

元安川沿いのパラソルギャラリー（H）

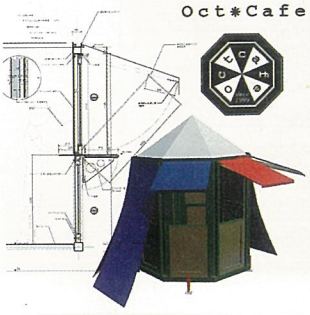
平和大通りのオープンカフェ（F）

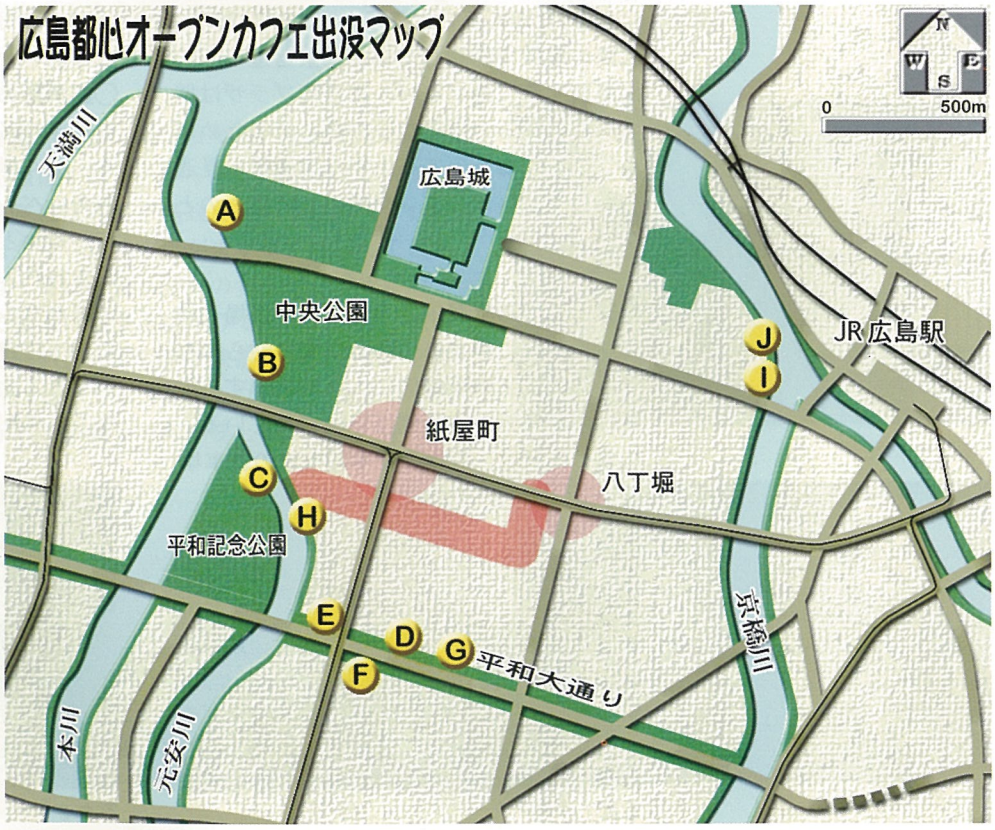
京橋川沿いに開設したオープンカフェ（J）

京橋川沿いに開設したオープンカフェ（I）

カフェテラス倶楽部の
シンボルマーク

元安川のオープンカフェで
使用している「オクトカフェ」





JUDI賞　九州ブロック

「シーサイドももち」

中村　久二
NAKAMURA KYUJI
ZEN環境設計

シーサイドももちセンタープラザの基本的考え方

地区の中の位置付け

シーサイドももち地区における本プラザは、二つの交差軸の交点となっている。二つの軸とは図に示すように、福岡タワー・マリゾンに向けて海に向かう文化・都市軸と人工海浜が造り出す自然のベルト軸である。プラザはその交点的役割を果たす。

文化・都市軸
自然のベルト軸

プラザは、二つの軸の交点としての機能を満たすために計画される。文化・都市軸の機能は、福岡タワーから海浜地区への人々の動線を受け入れる機能に止まらず、憩の空間として機能し、自然のベルト軸に対しては、人工的であるが自然の機能を連続させるべき松原の植生の連続を感じさせる緑地の連続性を確保することにより交点としての目的を果たす。**広場**：福岡タワーから本プラザにアプローチする人々は、人々を迎かえ入れるために計画された階段をのぼるに連れ、本プラザの持つ立地に驚きを感じることであろう。目の前に映る風景はプラザの手すり越しに見えるマリゾンであり、さらに進むと博多湾を意識できる。博多湾を一望に望むために理想的な高さを持った台地であることは気がつかずとも、地図上で認識していた「両手を広げた形の博多湾」をちょっと高い位置から確認することになる。たぶん高いところから鳥瞰したり、人間の眼線で認識していた風景と違うものが展開するに違いない。まさにプラザは博多湾を感じる台地となるのだ。そのためにもプラザと海を隔てる手すりは風景の見通しがしやすいオープンな機能を持つものとする。

軸線と二つの空間：博多湾を望む広場先端の中央部分に溜まりのある空間に逆らわないよう、人工海浜地区に人々を誘導する階段は中心軸の左右両側に計画されている。広場の形状は、広場の基本的機能の駐車場の効率を高めれる様、東西に広がりを持つ**博多湾を眺めるための溜まりの空間**がなさ形で計画された。広場の憩の機能を満たすためには、その左右の空間に積極的な活用計画が望ましい。

博多湾を眺めるための溜まりの空間
都市的デザイン要素を持った憩の空間
自然デザイン的要素を持った憩の空間

広場の平面的空間に、二つに振り分けた階段の動線軸と左右の空間の有効活用を利用者に無意識に誘導するため、無意識の二つの軸と二つの憩の空間を構成した。その領域は曖昧であるが活用を促す為の配慮である。中央部分は博多湾を眺めるための溜まりの空間であり、イベント時に活用される空間である。

○円形の空間（西側）東側と比較すると都市的デザイン要素を持った憩の空間である。訪れた人々は、連続する植栽の間に床から湧きあがる噴水や、その横に連続するベンチの先に円形に建ち上がった壁に眼が行くであろう。その壁には連続する小窓が空、家（建物）的な印象を感じるであろう。いったん中に入ると、人々は開放的な印象に驚くかもしれない。プラザの立地を忘れさせない海への解放性と後ろに控える道路に対する緩衝機能を持ちつつ小窓からのぞく緑の美しい切絵的空間は、単に心地よい憩の空間となるだけでなく、海辺の激しく変化する風を避ける休憩所機能も兼ね備える。ちょうど公園の中に設置される東屋や、パーゴラの日除けの機能の海浜版だと想像すればよい。

○四角形の空間（東側）西側と比較すると自然デザイン的要素を持った憩の空間である。低く構成された段状の芝生のテラスと四角いベンチは、穏やかな日差しの日に寝転がるなどゆっくりと休める場所として計画された。段状の芝生のテラスはそれぞれの縁がベンチとして機能する。また、たとえ芝生に寝転がったとしても海が望むことができるようレベルを変えるなど、視線的なことも配慮した。

写真 1

写真 2

二つの空間を視覚的に領域づけるものとして舗装パターンを変えている。都市的領域は、自然にあこがれるので有機的構成要素を自然的領域には、無機的構成要素で直線をと言うように空間構成を行った。

装置：多くの人々に解りやすい印象を付けるため、本プラザでは水と列柱を装置として計画した。水は、管理面に対するハードルがあるものの多くの人々に安らぎを与えてくれる。大きな水の動きは造らないが小さな水の動きを人々に誘導するが如く連続的に配置する。

列柱は、マリゾン側からも福岡タワー側からもプラザの存在を解りやすくするために機能する。プラザの存在をボリュームのあるもので強調したりすることは、プラザ内のデザイン的支配力が強く望ましくない。また列柱は無意識の領域を創る機能のみならず、照明用の装置として広場の印象を強いものにする。

風景・景観：プラザに対する外景観は、大きく二つの方向からである。福岡タワー側からはできるだけプラザの高さを意識させずのぼりたくなるようなデザイン的構成を行うことと、植物などを色々な高さで配置し、構造物を意識しにくい計画的配慮を行った。また、タワーからの鳥瞰は、最初に述べた自然ベルトの連続感とプラザ的機能が眼にはいるような平面構成を行った。マリゾンからの景観は、プラザの高さで壁ができるものの、壁面に陰影を付け面的な印象をできるだけ抑え、プラザ上に植物や構造物でできるだけ変化を付けることにより、圧迫感ある印象を少ないものにする配慮を行った。

夜間の空間：本プラザは、発展する福岡市を象徴するシーサイドももち地区のへそ的存在になる都市施設として機能しなければならない。都市化がますます進展してくればくるほど公共空間の多様化と充実に対する要求は高まるばかりである。特に、夜間に訪れ憩える安全で快適な公共空間の必要性は若いカップルのみならず、小さな子供がいる家族までも必要とし始めた。特に本プラザは夜間まで営業をしているマリゾンとの連携や、シーサイドももち地区との夜間の連動の機能を強化すべく、心地よいライトスケープ１を作り出す。

いわば本プラザはシーサイドももち地区の都市生活文化の象徴となるべきである。全体的には薄暗いが、福岡市内で言えば、警固公園や地行中央公園程度の照度を確保した照明計画を行う。プラザの性格上安全の確保を行うために、全体にある明るさが確保できるようにし、かつ公園を利用している人々がシルエットとなり夜のムードを全体に作る照明計画を行った。

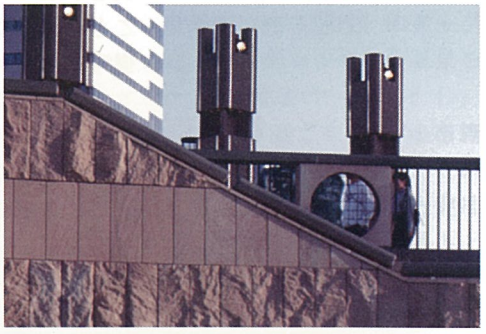


写真４

写真３

写真５

特別賞・奨励賞 功績賞・功労賞

中井川 正道
NAKAIGAWA MASAMICHI
JUDI賞選考委員会委員

5.特別賞・奨励賞・功績賞・功労賞

今回の滋賀県大津市で開催されたJUDI10 周年記念事業では、九つの JUDI 大賞候補がノミネートされたがその他の候補について、いずれもが甲乙つけがたいものであった。初めての試みに加えて、選考基準を模索しながらの選考結果であることから、今回露呈した様々な問題をしっかりと次回へ引き継ぐ必要があると考える。そのような準備不足の状況にもかかわらず、各ブロック会員の熱心な努力によって予想以上の応募パネル数（24 点）となり充実した選考内に幕を閉じることができた。誌面をお借りして参加者ならびに関係各位に厚く御礼を申し上げたい。各賞は、明確な選考基準はないが選考会議の中で大筋の了解を得ていた基準的内容をここに紹介する。特別賞は非常に多くの方々が関わり、歴史的時間の積み重ねによって醸成されてきた場所や空間が対象となってる。奨励賞は市民が中心となって真剣に町づくりに取り組んでいる姿勢がよく見える運動と、部分的にハードができていて今後の期待も含めて賞に値すると判断したものである。功績賞は社会的評価が既にあり、だれもが納得して推薦できるものとして選考された。選考委員の中には既に十分な社会的評価のあるものに対し、当会が賞を重ねて差し上げるのはいかがなものかという意見もあった。功労賞は直接空間づくりに携わったものではなく、空間を取材し取り上げ広く社会に広報していただいた努力に対して与えられた。財団法人が発行している小冊子もたくさん推薦されたが本来業務にあたる行為であると判断し選にもれた。今後は、JUDI 賞をトリエンナーレとして開催し継続することを選考委員会の中で了解されているが、選考基準をはじめとして運営組織や運営方法等の様々な問題が未解決のままであり、次回はこのような問題をクリアにした上で開催できるようにしたい。
以下に各賞の推薦文を紹介する。

■特別賞・関東ブロック－「大都会東京にある巨大な人口の森」

21 世紀を迎える節目にあって、JUDI 大賞は、今世紀の日本の都市空間、景観に長年にわたって大きな痕跡を残し、かつ 21 世紀に継承すべきものとして多くの人が共感し得るものに与えられることが望ましい。これは、近年の優れた取り組みに対する評価とは異なった視点である。東京、神宮内苑の森はまさにこのような視点から選ばれるべき代表的な空間であり、かつ森づくりに際しては、このことを予見して長期間の植物の遷移を視野に収めて樹種が選択されており、今後の私たちの取り組みにも大きな示唆を与えるものである。

・関西ブロック－「奈良公園と財団法人奈良の鹿愛護会」

聖なる空間としての歴史を千年以上にわたって積み重ねてきた奈良公園は、シルクロードの終点にふさわしい伸びやかな大陸的景観を呈している。この公園は、明治初期の混乱期に公園として指定され、その後、時代時代における環境改変への動きを乗り越えて、現在に引き継かれてきた。聖なるものへの人びとの畏れと慎みが、この環境を寺ってきたという事実は、野性の鹿との共生に如実に表れている。そうした環境保全に貢献している活動の一つが、「奈良の鹿愛護会」活動である。「琵琶湖とびわ湖を美しくする運動」日本最大の湖“びわ湖”を守っていくことは、滋賀県民の大きな責務である。－**「びわ湖を美しくする運動」**は県民総参加の清掃美化運動で、昭和 46 年にはじまった。7 月上旬、自治会や各種団体などが中心になって実施され、県下全域で 20 万人近い県民が参加する。身近な湖岸、河川、水路をきれいにすることがびわ湖を守ることにつながる。“びわ湖”を利用し、楽しむだけでなく、その保全に参加する。この運動は、“環境の世紀”といわれる 21 世紀の大きな社会的取り組みである。

■奨励賞・関東ブロック－「荒川の舟運」

一介の若き女性の「川に船を走らせたい」という一途な思いが、関係する様々な機関や実業家を動かし、埼玉県浦和市秋が瀬から東京都河西臨海公園までの舟運を実現させた。たった１人のロマンが制度を変え、魅力的な都市環境デザインを達成した事例。

写真１. 白熱した議論が交わされた選考会

写真２. 選考会のビデオ上映とパネル展示

・関西ブロック－「御堂筋と沿道企業」御堂筋に匹敵する道路は、国内では他に見当たらない。昭和 12 年に完成したこの道路沿いに31㍍ビルが建ち並んでいったのは、昭和 30 年代以降である。沿道企業の努力で高さがそろったまちなみが形成されたが、平成 7 年、新たなまちなみ誘導の指針が策定された。21 世紀にふさわしい景観が生まれることに期待する。－「旧居留地と旧慰留地連絡協議会」この地区は神戸開港とともに開設され、その後神戸のビジネスの中心として発展してきた。戦後、この地区に国際地区共助会が生まれ、それが旧居留地連絡協議会となった。1995 年の大地震によって地区は大きな被害を被うたが、協議会は復興計画、まちづくりガイドラインを策定した。歴史を継承するまちづくりに期待する。

■奨励賞－「RACDA が行く」ＬＲＴ（わが国では軌道敷を走る路面電車が一時期全盛であった）が、コンパクトな都市市街の交通を支え、それなりの都市景観を維持する上で役割を再度担うことが期待されている。この活用を図る市街の計画が意識されていることは敬服に値する。しかしこれに沿わせた街並みや都市活動配置の再構築はこれからの大きな課題であると考えられ、その成功を期待したい。

・九州ブロック－「環境再生に向けた風土デザインの展開」—水俣 15 年の歩み—「環境再生に向けた風土デザインの展開」—水俣 15 年の歩み—水俣を襲った悲劇は部外者には窺い知れぬ人々の心の痛みを地域社会にもたらした。再起不能とも思える地域・海域の汚染。街が死ぬとは、このようにあり得ると実感した。その中から人々が起ち上がり、未来への期待と希望をこめて、新しいまちづくり、絆づくりが芽生えてきているようだ。環境を克服し、新しい環境を自らの手で創ろうとする。嬉し涙とともに将来への道のりを期待したい。

・関東ブロック－「つくり、育てる谷中」

江戸のある町谷中　ホッとする環境をつくり育てる—谷中学校はいかに地域を再認識し直すか、再発見するかという、地域を見つめ直すことから住民の意識向上を目指した「環境学習プログラム」。町の人々とのやりとりに発し、改善箇所を住民自らの提案でどう変えていくのかという話から具体化していく「地域改善プログラム」。谷中に住まうということの楽しさ・すばらしさを今そこに住む人たちが再認識することから始まるまちづくり活動を推進し、谷中という地域に根ざした住民活動を先導している。

■功績賞・北海道ブロック－「小樽運河とその周辺」—歴史的環境と保存再生と市民まちづくり運動—戦前日本有数の商港都市として栄えた小樽も戦後、長く斜陽都市の代名詞ともなり、活気を失っていた。1973 年から始まる「小樽運河保存運動」は街の再生をめざす市民運動に発展し、小樽運河及びその周辺の歴史地区は観光を核に息を吹き返し、いまや北海道でも最も人気のある都市となっている。この 30 年間の小樽のまちの動きは、都市再生のダイナミックな変貌劇をみる思いがある。「190 年のｸﾞﾗﾝﾄﾞﾃﾞｻﾞｲﾝ」明治 2 年 11 月、はじめて札幌の地を踏んだ開拓使判官島義勇の描いた「壮大な街づくりの夢」は、130 年後の現在、札幌都心部の骨格をつくりあげ、その基軸とである大通公園は「雪祭り」「よさこいソーラン」の舞台となり、広く市民に愛される日本有数の都心広場に成熟している。緑の生態回廊として西の円山から東の豊平川まで大通公園を繋げる大拡張計画も動き始め、札幌の 21 世紀まちづくり構想は島判官の描いたｸﾞﾗﾝﾄﾞﾃﾞｻﾞｲﾝを完成すべく新たなスタートを切ろうとしている。

・関東ブロック－「代官山のアーバンデザイン」1969 年から 1992 年の四半世紀もの長きにわたる間、代官山において１人の地主と１人の建築家（槙文彦氏）のタッグマッチで東京に、魅力的なまちなみ風景を作りだしてきた。「建築家のｱｰﾊﾞﾝﾃﾞｻﾞｲﾝ」として最良の一つと評価できる。**「小布施のまちづくり」**小さな核から始まり、それが少しずつ拡がり、街づくり整備へと発展し、小布施を全国レベルの魅力スポットとした。影に日向に心地よい空間作りを支え推進したホームドクター的存在である建築家、地元代表の宮本忠長氏の功績は大きい。

写真 3．大津市助役西川壽輝氏御挨拶により開会

写真 4．初めての試みとなった「第１回JUDI大賞授与式」

「浜田山タウンセンター」1975 年、相続をきっかけにそれまでの農地を活用して、「借地権付低層集合分譲住宅」「商業施設と賃貸住宅や店舗付共同分譲住宅の複合開発」、杉並区で初めての「一団設計」、「樹木保存」、「駅前商店街へのしかけ」など、草の根プランナーやデザイナーもこの開発に協力した。その後、今日に到るまで適切な環境管理がなされ、地域にとけ込んでいくプロセスデザインが注目される。その後の低層集合住宅に影響を及ぼすこととなったプロジェクトである。－**「横浜市の都市デザイン行政」**—港と丘のまち横浜都心部の魅力をつくる－バブル経済に突入する結果に終わった日本の硬度成長経済奇跡。放置すれば経済効率論理だけの都市景観を創ろうとする動きを、横浜市行政は都市デザイン室の創設によってコントロールした。その功績は成果とともに大きい。しかし時代は変わっている。新たな市民型社会においての都市デザインの実現に向けて、 実践と先導を大いに期待したい。

■功労賞●季刊「ESPLANADE」 株式会社 INAX が季刊で発行している街づくり専門誌「ESPLANADE」は 1987 年 1 月 1 日に創刊された。一般的に街づくりに関する意識の薄い時代に、企業の PR 領域を越えた画期的な冊子であった。現在 14 年目を迎える。毎号の特集では、取り上げる一都市を独自の視点で紹介する。そこに携わる様々な人物による寄稿とともに、都市に対する考え方が浮き彫りにされている。写真などを含め、質の高いビジュアルを重視した理解しやすい表現は、実務資料としても大変有意義である。

企業を取りまく厳しい経済環境の中にも、今日まで継続されているのには感服する。

●隔月刊「造景」 株式会社建築資料研究社バブル経済の崩壊によって、土木、建築、そして造園などが目標を見失いつつある中で、5 年前に「造景」は創刊された。

今年で 30 冊になる。「素晴らしい都市は美しい」という信念のもとに、各領域を統合し、そこに新たな課題を投げかけた。編集長平良敬一氏の対談から始まり、多様な視点と問題意識を提示し続けている。そのきめの細かい豊かな内容は、都市デザインに関わる者にとって、大変貴重な冊子である。

昨今の厳しい社会環境の中、民間の出版社が自力で継続し続けている努力と、質の高さに感銘する。**●季刊「PURE」 日本興業株式会社ピュア**は 1991 年(11 月)にその刊行を開始し、1996 年(8 月)の最終刊まで、全 25 巻が刊行されてきた。ピュアに掲載された内容は、一企業の広報誌の枠を越えた高い水準のもので、都市環境デザインの手法の向上およびその普及・啓発に大いに貢献したと評価できる。ピュアは 1991 年(11 月)にその刊行を開始し、1996 年(8 月)の最終刊まで、全 25 巻が刊行されてきた。ピュアに掲載された内容は、一企業の広報誌の枠を越えた高い水準のもので、都市環境デザインの手法の向上およびその普及・啓発に大いに貢献したと評価できる。**●株式会社 学芸出版社学芸出版社**はこれまで百冊を越える都市環境デザイン・まちづくりに関する書籍の出版を行なってきており、とりわけこの数年の出版数には目覚ましいものがある。日本社会における都市環境デザイン・まちづくりの展開にあっては、情報の発信と交流が不可欠であり、同社のこれまでの業績を高く評価したい。学芸出版社はこれまで百冊を越える都市環境デザイン・まちづくりに関する書籍の出版を行なってきており、とりわけこの数年の出版数には目覚ましいものがある。日本社会における都市環境デザイン・まちづくりの展開にあっては、情報の発信と交流が不可欠であり、同社のこれまでの業績を高く評価したい。**●阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワークこのネットワーク**は大地震勃発の 10 日目にいち早く結成された。このネットワークによって、専門家が適材適所で復興に取り組む体制が準備された。その後、ネットワークを通じた情報交流によって、専門家の切磋琢磨が行なわれ、復興計画における都市環境デザインに大いに貢献したと評価できる。

写真 5．開票作業風景

写真 6．表彰式

事務局より

1．新会員の紹介

２０００年１１月１日～１２月３１日の入会者は下記の通りです。（入会順、敬称略）

１２月３１日現在の会員数は、５２６名です。

氏　名	勤　務　先
藤川　敏行	㈱環境開発研究所
須谷　修治	(財)都市防災研究所
伊藤　幹郎	出雲市
服部　圭郎	㈱三菱総合研究所
佐々木　健	㈱ケンアンドスタジオバンガード

2．退会者（2000年11月～12月）

弓良一雄（敬称略）

3．住所変更等（敬称略）

氏　名	変　更　内　容（新）
植本　俊介	植本計画デザイン Fax. 03-3355-9515
谷口　庄一	リージョナル・ブレインズ 〒491-0852 一宮市大志1-5-9-602 Tel. 0586-28-7270 Fax0586-28-7271
野口　和裕	積水樹脂㈱道路・都市環境カンパニー新事業推進室 〒530-8565 大阪市北区西天満2-4-4 堂島関電ﾋﾞﾙ6F Tel. 06-6365-3256 Fax06-6365-7150
松谷　春敏	岐阜市役所 〒500-8701 岐阜市今沢町18 Tel. 058-265-4141 Fax058-264-1931
宮口　恒樹	エルエー都市環境工房 〒592-0013 高石市取石2-48-30 Tel. 0722-73-9886 Fax0722-73-9887

お知らせ

機関誌「ＪＵＤＩニュース」から「ＪＩＤＩ」へ変更

発行時期の遅れや編集内容のニュース色の欠如などもあり、ホットで新鮮な情報を掲載すべきニュースと言う役割が２ヶ月に１度の機関誌では困難となっています。ホームページなど他の情報媒体の活用を今後検討が必要であるとともに、機関誌としては「ＪＵＤＩニュース」の名称を改め、２１世紀から「ＪＵＤＩ」として再出発します。（広報出版委員会）

編集後記

この特集を組むにあたって、テーマ会議では様々な議論がされた。くしくも JUDI 発足 10 年目にあたり、記念事業として企画された主要な企画である「JUDI 賞」を取り上げることは至極必然であった。関西ブロックでの記念事業へは多くの方々が参加されたことと思う。しかし、当然全ての会員が現場に足を運べたわけではない。（私もその一人ではあるが）多くの会員が加入はしているが中々実際の活動に参加することは諸事情により困難なことが多いであろう。御多分に漏れず私も会員になり 10 年近く熱心な活動は出来ず仕舞で、もっぱら送られてくる JUDI NEWS をぺらぺらと眺めて、業界の動向の情報収集に当たるくらいであった。

10 周年目になって機会があり広報委員を携わることとなり、当然であるが改めて本誌が会員と会とを繋ぐ重要なファクターであると認識させられた。その意味からも、今回受賞された方々や業績の解説には、単に作品紹介で終始するのではなく、受賞するまでの経緯や事由等の説明が不可欠であったような気がする。

執筆を戴いた諸先生方には、年末の大変忙しい中、時間を割いて原稿を仕上げて戴き大変感謝をしている。会員へインフォメーションする役割と同時に、大事な節目の事業をドキュメンテーションする意味からも、このように内容をまとめておくことは大変意義深いものであると考える。

今回慣れない編集作業を終えてみて、携わる委員らも日常業務の多忙な中、中々時間を割くことが容易ではなく、今回も編集テーマや内容の打ち合わせはメイルによるやり取りが多くを占めた。また、戴いた原稿も大半がデジタルデーター化がされたものであった。精度の問題で写真は紙焼き原稿もやむを得ないと思うが。実際多くの時間を取られたのが最後のレイアウト作業である。これだけ世間的にも業務的にも IT 化が進んでいるのだが、JUDI NEWS の原稿作成に関しては未だアナログの切り貼りで行わなければならない。若き頃を思いだし久しぶりにスプレー糊とカッターを持って作業を行った。本来であればこのような作業はデジタルなシステムを構築することで完全 DTP も可能なのである。

丁度 10 年前、先端的なデジタル調のロゴで出発した JUDI も新世紀を迎え、その心意気に応えるよう本当の意味でも内部から進化を望む点である。

広報・出版委員会

澤木　俊岡	石崎　均
土田　旭	伊藤　光造
近田　玲子	清水　泰博
菅　孝能	河本　一行
中嶋　猛夫	森川　稔
櫻井　淳	横山あおい
松村みち子	吉田　慎悟
白濱　力	作山　康